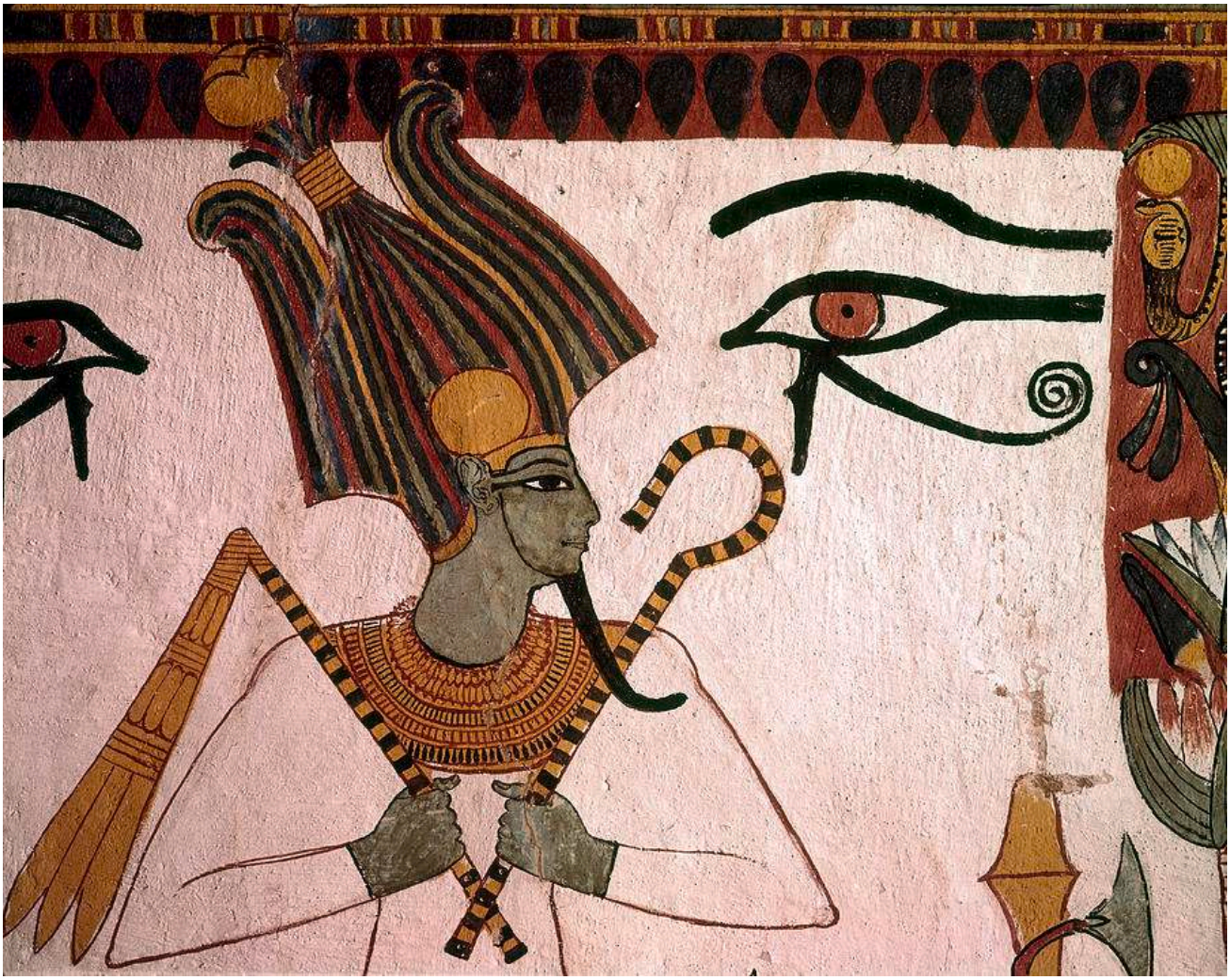
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 271

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2019

目次

5401. 2019年で最も充実していた日曜日を振り返って

5402. 大晦日前日の早朝より

5403. マルタ共和国への旅行に向けた準備：今朝方の夢

5404. 非言語的な活動を司る右脳の活性化と脳の包括的な運動の実感

5405. 13時間分の音声教材を作り終えて：仮眠中のビジョン

5406. ジョギング中に閃いた2つのアイデア

5407.【マルタ共和国旅行記】2019年最後の日に

5408.【マルタ共和国旅行記】フローニンゲン中央駅に向かう道中の出来事

5409.【マルタ共和国旅行記】ハウワーの“Klangreihe”の探究：自己と世界との関係

5410.【マルタ共和国旅行記】自己究明を通じた世界究明：原型モデルと音列

5411.【マルタ共和国旅行記】マルタ共和国に到着して

5412.【マルタ共和国旅行記】ホテルの自室で思うあれこれ

5413.【マルタ共和国旅行記】マルタで迎えた新年の朝に

5414.【マルタ共和国旅行記】成熟と若返りの同時進行過程の中で

5415.【マルタ共和国旅行記】元旦の誓い

5416.【マルタ共和国旅行記】2020年最初の夢

5417.【マルタ共和国旅行記】使命・天命

5418.【マルタ共和国旅行記】ヴァレッタ観光に向けて：今朝方の夢の続き

5419.【マルタ共和国旅行記】ヴァレッタの国立美術館と国立考古学博物館を訪れて

5420.【マルタ共和国旅行記】スリマの書店で購入した5冊の書籍

© YOHEI KATO 2019

5401. 2019年で最も充実していた日曜日を振り返って

時刻は午後の8時を迎えようとしている。今、どこからともなく花火が打ち上がる音が聞こえている。

2019年最後の日曜日が終わりを迎えようとしている。今年最後の日曜日は、今年で最も充実した日曜日であった。それはもう当たり前である。日々が絶えず充実感の増大過程の中で進行しているのだから。

夕方に見た赤紫色の美しい夕日。それは2019年最後の日曜日の空がくれた最高の贈り物であった。天はそうした贈り物を届けてくれたのである。私はそれをしっかりと受け取り、何かを感じ、何かを考えながら、その瞬間を味わっていた。いや、もうそこには何かを感じようとしたり考えようとしたりするような作為的な自己はいなかった。

先ほど、またしても自己の存在について、先日の日記の言葉で言えば、自己の「有りや無しや性」について考えていた。なるほど、自分という自我は円の中心点のような存在であり、そうした点があることによって、その点を中心にした一つの円が生まれることに気づいた。その中心点は極小、いやそもそも大きさを持たないものであり、それは存在しているとも存在していないとも言える両義性のあるものなのだが、それを理解した上で改めて自己の存在を俯瞰的に眺めると、それが有るや無しや性を通った（超えた）上でしか存在し得ない円があることに気づく。私たちはそれを「縁」と呼んでいるのだろうか。

円の中心かつ、縁の起点となり、縁を生む存在としての自己を、私は再度認めようと思った。やはり自己は存在意義や価値のようなものを紛れもなく帯びているのである。2019年の最後の日曜日に、そうした形で自己をある種積極的に肯定できたことは素直に喜ぶべきことなのかもしれない。

今日は2019年を締め括る形でオンラインゼミナールのクラスがあった。今日はとびきり充実したクラスであったと個人的に思う。それは私個人の感覚であり、本来は受講者の皆さんの観点を考慮するべきだが、少なくとも私は充実感を感じさせてもらっていた。ゼミナールに加えて今日は、拙書『能力の成長』をもとにした協働プロジェクト用の音声教材を積極的に作成していた。結局今日で全ての音声教材を作成することはできなかったが、ここ数日間で一気に100個ほどの音声ファイルを作成した。確かに言葉を語っているのは自分なのだが、何かが――もしかしたら先日の夢で出てきた

古代エジプト文明の何らかの神々の一つが──自分に憑依した感覚の中で無心で言葉を発している自分がいた。確認すると、今のところ687分ほど話をしていたようであり、およそ11時間ほど人間の知性や能力の発達について話をしていたことになる。

本書の出版からすでに2年半が経っていることもあり、書籍に書かれていないことや書けなかったことを今回の音声教材を通じて随分と補足した。明日はいよいよマルタ旅行に出かける前日なのだが、荷造りはすぐに終わるため、明日もまた音声教材を作っていこう。幸いにも明日は時間があるから、明日の夕方までにはこちらの音声教材の作成は終わるだろう。

今週末に行ったオンラインゼミナールの2回のクラスに関しての振り返りは、マルタ共和国のホテルで行おうと思う。そのため、クラスの中で取ったメモは忘れずに持参しよう。滞在先のホテルで改めて振り返りの音声教材を作成し、同時に受講者の皆さんからいただいている質問にもマルタで回答しようと思う。あるいは、年明けにも質問が寄せられていたら、それらについてはミラノのホテルで回答しようと思う。今年の年末をそのように充実した形で過ごせることはとても有り難く、年明け早々もそうした形で充実感を持って日々を過ごせることを限りなく有り難く思う。今この瞬間に外の世界で打ち上げられている花火がそれを祝福してくれている。フローニンゲン：2019/12/29（日）20:11

5402. 大晦日前日の早朝より

時刻は午前3時半を迎えた。今朝の起床は午前3時だった。大晦日を前日に控えた今日も、いつもと変わらない生活リズムを送る自分がいる。昨日は少々花火が打ち上げられており、今日もまたそのような1日になるだろうか。明日の大晦日はもっと盛大に花火が打ち上げられるだろう。

いよいよ明日からマルタ共和国及びミラノへの旅行が始まる。あれよあれよというままに出発の日を迎えようとしている。特に師走の今月は、オンラインゼミナールの実践編が開催したこともあり、また現在協働中のプロジェクトにおいて音声教材を大量に作成していたこともあり、あっという間に時間が過ぎていった感覚だ。

今日は旅行の前日であるが、本日も取り組みたいことがいくつかあるため、それらをいつもと同じように行っていく。普段と全く変わらずに作曲実践をし、日記を少々執筆し、そして音声教材を作成していく。音声教材に関しては、いよいよ今日で作成を終えることができるだろう。

ここ最近は、毎日曲を10曲近く作っていたが、昨日は5曲にとどまった。その理由としては、オンラインゼミナールのクラスや協働プロジェクト関係の音声教材の作成の方に力を入れていたためである。今日もあと少しばかり音声教材を作成していく。午前中の早い時間帯から取りかかれば、なんとか夕方までには作成を終えることができるだろう。

昨日は25個ほど音声ファイルを作成しており、今日はそれほど多く作成する必要はないかもしれないが、それだけの量を作成する必要があったとしても、集中力を持って作成に当たりたい。全ての音声ファイルを作成した上で、明日の朝マルタに向けて出発しよう。

今日をもって協働プロジェクト関係の音声教材の作成をいったんやめて、あとは作成した教材に対して、協働者の方々からフィードバックをもらおう。編集などは全てお任せをしており、もし仮に追加で何か録音する必要のあるトピックを教えてもらったら、それらは年明けに録音していきたい。まとめると、今日の計画としては、もう少し日記を綴ったら、そこから早朝の作曲実践を行う。早朝の作曲実践は、毎朝歯磨きをするのと同じか、今この瞬間に飲んでいる小麦若葉のドリンクを飲むのと同じぐらいの習慣になった。それは大変喜ばしいことであり、こうした習慣化のおかげで、1日の生活に創造的なリズムがもたらされる。

自分にできるのはそのリズムに沿って創造運動をし続けていくだけであり、それはもはや特段の意識など必要なく行われる。今この瞬間も、もうすでに自分なりの創造運動のリズムに乗っている。自己を超えた創造のエネルギーの恩恵を受け、そこからもたらされる心地良い創造のリズムに身を委ねること。そうすると、創造のメロディーとハーモニーに自己が包まれ、あとは何も意識せずとも、勝手に創造活動に従事する自己が生まれる。そこでは創造活動と自己との完全な一致がある。

創造活動が、自己を通してなされていく。自己を媒介して生み出される何か。今日もまたそれを大切にする。自分はそれを言葉や音を通じて形にしていく役割を与えてもらったのである。その役割を担っていくという意識なしに担っていこう。一切の作為なく、創造への意思もなく、作為や意思を超えて、自己が純粋な創造活動そのものとして今日も生きていこう。フローニンゲン：2019/12/30（月）03:55

5403. マルタ共和国への旅行に向けた準備：今朝方の夢

大晦日を前日に迎えた月曜日の早朝。辺りはとても心地良い深い闇と静寂さに包まれている。それらは私にとっての最良の友である。闇と静寂さ、それは紛れもなく、自分にとってとても大切な親友である。

今日も昨日に引き続き、気温が低いようだ。昨日は昼近くまでマイナスの世界だった。今日も似たような気温らしいが、幸いにもマルタ共和国に向けて出発する明日は気温が上がるらしい。

自分はいつも運がいい。とりわけ旅の最中は、そうした運の良さを実感する。先日のヴェネチア旅行の際の出来事に関してみても、結局色々と運が良かったのである。今回の旅行中も運に恵まれ、そして大切な縁に恵まれるだろう。そのような予感がする。

先ほど今日の取り組みについて簡単に書き留めていたが、それらに追加して、今日は部屋の掃除をしておこう。大掃除とまではいかなくても、気が付いたところは普段の掃除よりも入念に行っていこう。そして夜にサッと荷造りをする。その前後に、明日のフライトの時間をもう一度確認したり、マルタ共和国の空港から宿泊先のホテルまでの経路を確認し、地図をPDF化しておく。空港からホテルまでは途中下車のないシャトルバスが運行しているようだ。

先日のヴェネチアもそうしたシャトルバスを利用したことを思い出す。シャトルバスの時間とバス停について調べておこう。それと、明日にアムステルダム空港を訪れたときに、Priority Passで活用できるラウンジがいつものものと違うものが使えないかを確認しておきたい。これまで利用してきたラウンジに不満はなく、むしろいつもリラックスした空間を提供してもらっていることに感謝をしているぐらいなのだが、明日はちょっと気分転換も兼ねて、いつも使っているラウンジ以外のものを使ってもいいかと思っている。ラウンジを比較する意味も兼ねて、その他のラウンジも利用できるのであれば、せっかくなのでこの機会に利用してみよう。部屋の掃除、荷造り、旅行初日に必要な地図のダウンロード、そして空港ラウンジの調査、それらを行えば明日に向けての準備は万端だと言える。

今日もこれから早朝の作曲実践をして、協働プロジェクト関係の音声教材を作成していく。それらがひと段落し、旅に向けた準備をし始めると、徐々に旅に向けて気持ちが高まってくるだろうか。明日からのマルタ及びミラノへの旅行に向けて、心身共にゆっくりと準備をしていこう。

© YOHEI KATO 2019

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、見慣れない体育館にいて、そこで中学校時代の後輩2人とバスケのパス練習をしていた。後輩のうち1人は、後にバスケ部のキャプテンになった人物であり、もう1人はテニス部に所属していた後輩だった。なぜテニス部の彼がバスケの練習を一緒にすることになったのかは定かではないが、私たち3人は和気藹々とした雰囲気の中で、時折冗談を言いながらパスの練習をしていた。するとあるところで、私の体が宙に浮き始め、そこからは私だけ宙に浮いた状態でパス練習を始めた。2人の後輩は、私が特殊な能力を持っていることに驚いており、その力を使ってパスをするのはずるいと羨ましがった表情で述べた。それは別に妬みの感情ではなく、むしろ2人はそうした力を自分たちも手に入れたいようだった。

そのような夢の場面があった後、次の夢の場面では、巨大な闘技場に私はいた。そこでは私の身体はなく、闘技場で行われている2人の人物の闘いを眺める者としての意識だけがそこにあった。誰と誰が戦っていたかというと、私が幼少時代に見ていたアニメの主人公とその敵だった。難敵の人物は何度も進化を重ねるキャラクターであり、それは最終形態としてそこにいた。

2人はお互いに死力を尽くして闘っており、闘いはいよいよクライマックスを迎えようとしていた。アニメの主人公が特大な気のエネルギー光線を相手に向かって放出し、敵のキャラクターはその巨大なエネルギー光線を手で受け止め、それを宇宙の彼方に向かって弾き飛ばした。だが、それを手で受け止めようとした代償は大きく、敵のキャラクターはそれによって自分のエネルギーを使い果たしてしまったようだった。その結果、敵のキャラクターは最終形態から進化の逆向きに退化し始め、身体が見る見るうちに劣化していき、サイズが小さくなっていった。そこからアニメの主人公は、小さくなった敵のキャラクターをけちょんけちょんに踏みつけ始めた。今朝方はそのような夢を見ていた。明日の朝に夢を見なければ、今朝方の2つの夢が2019年に見た最後の夢になる。今朝方の夢のシンボルが何を象徴しているのかについてはいくつか思い当たることがあり、それらについては文章を書かずして自分の内側で静かに向き合うことにしたい。フローニンゲン:2019/12/30(月)04:26

5404. 非言語的な活動を司る右脳の活性化と脳の包括的な運動の実感

そういえば、年末年始に旅行をすることは今年が初めてかもしれないと思った。過去の記憶を辿ってみたときに、年末年始に旅行に出かけていたことはこれまでないように思う。いつもは大抵実家で

年末年始を過ごしていた。この8年間の欧米生活においても、毎年年末に一時帰国をしていた。だが昨年から年末に日本に一時帰国することをやめ、昨年初めて日本以外の場所で年を越したように思う。昨年からは様々なことを考えて、もう年末に日本に一時帰国することをしないようにしようと思ったため、一昨年の年末に実家で過ごしたことが、当面は最後の日本での年越しになるだろうか。

昨年はオランダで年越しをし、今年はマルタ共和国で年越しを迎える。来年はどこで年越しを迎えるかはまだ未定であるが、オランダ以外の国で静かに年を越すことになるかもしれない──フィンランドの森の中の宿泊場所で、暖炉に当たりながら年越しをしたいという思いがある──。

それではこれから早朝の作曲実践に取り掛かる前に、昨日ぼんやりと考えていたことを書き留めておきたい。一つには、自分なりの幸福感を感じながら毎日を生きられるということの証明を自らの人生において果たしていくということを考えていた。その方法についてはもう明確であり、今この瞬間に行っていること、日々行っていることをこれからも継続していくのみである。

ただし昨日の気づきは、そうした毎日の瞬間瞬間の行為に対する意味付けが変化した、あるいは新たな役割のようなものがそこに付加されたと言えるかもしれない。存在の自己証明のみならず、人間がこの世で人間として生きることの中に絶えず幸福感を感じられるということ。それを自らの人生を通じて証明し、その証明過程と証明結果を世の中に共有していくという生き方。そうした生き方を今現在も行っている自分がここにいて、それを継続していく意思をより明確に認識した自己が昨日にいた。

その他に創造活動に関しても気づきがあった。日々継続して日記を書くことによって、左脳の言語野が知らず知らず育まれていき、日々の作曲実践によって知らず知らず右脳の非言語的な領域が育まれていることに気づいた。実際には、作曲実践だけではなく、毎日小さな絵を水彩色鉛筆で描いているため、そうしたことも右脳の領域の肝要につながっているようだという気づきがあった。実感として、そうした創造活動のおかげで、脳がようやく統合的に機能し始め、統合的に発達し始めているように感じる。今日もまた、自分の脳が包括的な運動をしてくれるだろう。こうした包括運動は、脳の局所的かつ偏った運動を防いでくれ、脳がとても心地良いように感じているためか、文字通り、

朝から晩まで創造活動に没頭していても──没頭しているがゆえにかもしれない──、一切の疲労感を感じない。

朝の3時ぐらいから夜の9時過ぎまで創造活動に従事していても一切の疲労感を感じないがゆえに、疲労を回復させるための睡眠というのは必要ではなくなっている。ここ最近の自分の睡眠を眺めていると、それはもはや心身の疲労を取り除いたりすることには使われていないことがわかる。それは純粋に、その日1日の学びを咀嚼するため、自己の存在がその日に学んだ内容をあえて一度忘れるため、そしてその日の自分が死に、新たな自分に生まれ変わるために睡眠があるように思える。睡眠の意味については引き続き考えていこう。とにかく今は作曲がしたい気分だ。フローニンゲン:2019/12/30(月)05:09

5405. 13時間分の音声教材を作り終えて:仮眠中のビジョン

時刻は午後の2時を迎えた。今日は大変天気に恵まれており、日光が本当に心地良い。今、椎茸を天日干しにしており、彼らの喜ぶ姿を見て私も嬉しく思う。確かに彼らは後ほど私に食べられてしまうのだが、彼らは私の血となり肉となり、この世界で生き続ける。

雲ひとつない青空をカモメが旋回している。今から少々作曲実践をしたら、近所の運河沿いのサイクリングロードにジョギングに出かけようと思う。明日の朝からマルタ共和国に行くため、後ほどのジョギングは今年最後のものとなる。ジョギングから戻ってきたら、部屋とトイレの掃除を行い、明日の旅行に向けてまずは地図のダウンロードと空港ラウンジのチェックをしよう。夕食後、少し休憩をしたら、サッと荷造りをしよう。

今日は午前中に、無事に協働プロジェクト関係の音声ファイルを作成した。朝の早い時間帯から作成していたこともあり、それは非常に捗り、結局全体として115個の音声ファイルを作成した。時間としては、780分(13時間)超となった。題材は『能力の成長』なのだが、出版から2年半経ったということもあり、補足する理論的･実践的な項目が随分とあり、それらを補足しているとそのような時間に及ぶ音声教材が出来上がった。

今日は大晦日の前日であるが、一応依頼を受けていた仕事が終わったことを協働者の皆さんに伝えておこうと思う。そのメールは夕食後に行う。これにて協働プロジェクト関係の音声教材の作成が

完了したので、明日からはオンラインゼミナールに関する録音教材を作成していく。明日からマルタ共和国に滞在するが、それは全く関係ない。明日が大晦日であることも全く関係ない。自分が充実感を感じられること、幸福感を感じられること、喜びを感じられることに毎日取り組み続けていくだけだ。

先週末の金曜日と日曜日に行われたゼミナールのクラスのメモを忘れずに持っていき、マルタのホテルで直近2回のクラスについて振り返りの音声ファイルを作る。以後、マルタとミラノでは、受講者の皆さんから寄せられた質問に順次回答していく。

先ほど仮眠を20分弱取っていると、少々ビジョンを見た。ビジョンの中で私は、フローニンゲンの自宅にいた。時刻としてはまだ午後の比較的早い時間だと思ったのだが、なぜか部屋は薄暗く、幾分不気味ですらあった。私は下の階に郵便物を取りに行ったところ、結局そこには何も届けられておらず、すぐさま自室に戻った。部屋の扉を開けると、地面に1枚の紙が置かれていることに気づいた。何やら英語で文章が書かれており、下の階の人からの置き手紙かと思ったが、それは書斎の机に置いていた自分のメモ用紙だった。それを拾い、再び書斎の机についたところで仮眠から覚めた。仮眠後、自分の意識は現実と夢見の世界の中間を彷徨っているようだった。フローニンゲン：2019/12/30（月）14:28

5406. ジョギング中に閃いた2つのアイデア

つい先ほど近所の運河沿いのジョギングから戻ってきた。暮れゆくエメラルドグリーンの空の下、気分転換にはうってつけのジョギングを十分に満喫した。ジョギングの最中、二つほど作曲実践に関するアイデアが降ってきた。どちらも突飛なものだが忘れずに書き留めておきたい。

1つには、「真言密教的な詩あるいは俳句のような短い曲、さらには西洋的な聖歌のような祈りの曲を作る」というものだった。最初に前者の真言密教的な詩ないしは俳句のような曲を作ろうという意思が芽生え、その後に西洋的な聖歌のような祈りの曲を作ろうと思った。前者に関しては、そもそも真言密教的な詩や俳句のようなものが存在しているのか不明だが、直感的に空海関連の文献を調査してみたり、空海や密教に影響を受けた詩人や俳人がいないかを調べてみる。後者について言

えば、私がそもそも欧州で生活をしていることもあり、日々目には見えない形で教会音楽的な何かを感じていることが影響しているのかもしれない。

聖歌に着想を得て、祈りの効果を持つような曲を作りたいという思いが芽生えた。聖歌に関しては、今のところバッハぐらいしか思いつかないのだが、その他にも優れた聖歌を残した作曲家が多々いるであろうから、そうした作曲家に対してアンテナを貼っておきたい。

もう一度前者に戻ると、おそらく密教が言葉の呪術的な力を喚起したのと同じことを短い曲を通じて行えるのではないかという直感的な仮説がある。曲はまさに私たちの情動を直接的に刺激し、それはひょっとすると言葉よりも強いものがあるかもしれない。非言語的であるがゆえに、無意識下に働きかける力がより強大であるように思える。とは言え、まずは言語の呪術的性質について、ちょうど偶然ながら数日前に読み返そうと思っていた井筒俊彦先生の書籍“Language and magic: Studies in the magical function of speech (1956)”を参考にしようと思う。言語の呪術的な性格を理解した後には、曲に内包された物語という大きな器にも呪術的な作用を内包させることができるのではないかと思っているため、ストーリーテリングについても探究を行なっていきたい。

以上が1つ目のアイデアであり、もう1つは、ミラノから帰ってきたら、過去の偉大な作曲家が残した手紙が収められた書籍を読んでいこうというものだった。これもまた突然降ってきたアイデアであり、一昨年においてすでにモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパンたちの手紙が収められた書籍をそれぞれ購入していたのだが、これまで積読状態だった。それがここにきて、突如として彼らの手紙を読みたいと思ったのである。

彼らが生活をした場所については過去に実際に足を運んでおり、彼らがどのような場所で作曲活動を行なっていたのかは体感的になんとなく理解できる。そこからさらに彼らが生きた世界の情景や感覚をありありと理解したいと思い、彼らの手紙を読むことにした。彼らが生きた世界を臨場感を持って感じられるようになることが、彼らの曲をより深く理解する助けになり、彼らの曲を参考にして曲を作る際に、彼らの曲から得られるものが変わってくるだろう。端的には、彼らの存在エネルギーのようなものを分け与えてもらうようなことが生じるのではないかと直感的に思う。彼らの手紙をゆっくりと読み進めることは、年明けにミラノから戻ってきてから始めよう。フローニンゲン：2019/12/30（月）16:02

5407.【マルタ共和国旅行記】2019年最後の日に

時刻は午前3時半を迎えつつある。2019年最後の日である大晦日がやってきた。今朝は2時過ぎ(2:20)に起床し、その後すぐに浴槽に湯を張って入浴をした。

今日からいよいよマルタ共和国･ミラノ旅行が始まる。幸いにも、今日のフローニンゲンの天気は良いようであり、マルタ滞在中も天気に恵まれるようだ。マルタでの滞在期間は4泊5日であり、新年である明日はとりわけゆっくり過ごそうと思う。店や美術館なども閉まっているようだから、ホテルの近所を散歩したり、ホテルでゆっくり過ごすつもりだ。

マルタへのフライトは11:30であり、ボーディングから逆算して、フローニンゲンの自宅を午前6時過ぎに出発しようと思う。駅に早めに着き、カフェでコーヒーでも購入しようかと思う。

今回マルタへ向かうフライトは事前にウェブチェックインができないものだったので、空港に到着したらまずはマルタ航空のカウンターに行く。そこでボーディングパスを発行してもらい、その後セキュリティーを通過する。大晦日に空港に行くのは今回が初めてのため、どれくらいの混み具合なのか関心がある。

セキュリティーを通過したら、ラウンジに向かう。昨夜調べたところ、プライオリティー･パスのカードで使えるラウンジは結局いつものところしかなかった。いつもお世話になっているラウンジに対しては全く不満はないため、ボーディングが始まるまで、そのラウンジでエスプレッソでも飲みながら作曲実践をしたり、日記を執筆したりしようと思う。

今回滞在するマルタ共和国にせよミラノにせよ、共に歴史的な堆積がなされている場所であるから、場が持つエネルギーを大いに感じてこようと思う。それらの場所には、自己を涵養し、治癒してくれるエネルギーが満ち溢れているだろう。そうした目には見えないエネルギーとしての歴史的体積物を感じること、及びそれを自己に取り入れることを自然に行なっている自分がいる。そして、どうやら自分はそうしたものを旅先で求めている傾向にあるようだということに気付く。

2019年の終わりと2020年の始まりに、マルタとミラノを選んだ何かしらの理由があるはずだ。あるいは、自分をそれらの場所に導いた何かがきっとあるはずである。それが何かの確認を含め、今日からの旅は大いに楽しみである。フローニンゲン:2019/12/31(火)03:39

5408.【マルタ共和国旅行記】フローニンゲン中央駅に向かう道中の出来事

たった今、アムステルダム空港に向かう列車に乗った。列車は駅のプラットフォームで停車していて、もう10分弱で出発する。今日は大晦日ということもあってか、乗客の数はいつもより少ない。確かに時刻はまだ午前6時半であるから早いのだが、この時間であっても通常であればもう少し乗客がいる。

駅に向かう道中はとりわけ静寂さに包まれていた。まるでフローニンゲンの街から人が消えてしまったかのような感覚であり、すれ違う車や人はほとんどいなかった。だがそんな中、自宅を出発してすぐ近くにあるバス停の前を通り過ぎようとした時、向こうから1人の男性がこちらに近寄ってくる姿が見えた。反対側の道路にあるそのバス停には3人の男性がバスを待っており、そのうちの1人が私の方に向かってきたのである。

その男性が近寄ってくる足取りはゆっくりであり、彼の表情を見ると、笑顔を浮かべていた。最初私は、彼が近寄ってきたときにカネか何かをせがまれるのかと思ったが、彼の表情が笑顔であり、バス停で待っている残りの2人は彼の子供であるように思えたため、特に身構えるでも逃げるでもなく、歩き続けようとした。そして彼との距離が近づいてきた時、彼は私にオランダ語で話しかけた。オランダ語で挨拶を交わした後、すぐに私は英語でどうしたのかと尋ねた。すると、どうやら道に迷ってしまったとのことだった。

男性:「すいません、フローニンゲン北駅はどちらですか？」

私:「中央駅ではなく、北駅ですか？ええっと、北駅の方向は…」

男性:「あっ、中央駅でも大丈夫です」

私:「中央駅ならあっちの方です。ちょうど私も中央駅にこれから行きますよ」

男性:「どうもありがとうございます」

その男性はフローニンゲンに精通していないとのことであり、大晦日前日を家族か友人の自宅の家で祝ったのだろうと思われる。彼に尋ねられて初めて気づいたが、そういえば私はフローニンゲン北駅を使ったことはこれまでの4年間で一度もなく、その正確な場所は知らない。

書斎の窓から通りを眺めたときに、北駅行きのバスが通り過ぎるのを見かけることがあり、大体の方角しか知らなかったのである。彼らが目的地としていた北駅を教えることはできなかったが、彼らは中央駅の方向について知れたことで満足しているようだった。果たして私は彼らにとってどれだけ役に立てたのかわからないが、ちょっとした親切な行為を大晦日の朝にすることができて、その後の足取りは軽かった。駅に向かうまでの道のりはまだ闇に包まれていたが、フローニンゲン上空の星空を眺め、思わず口笛を吹いている自分がいた。

そうこうしているうちに駅に到着し、駅の美しいイルミネーションを見て、今年もいよいよ終わりなのだという実感が湧いてきた。6時半に開店するコーヒー屋でコーヒーを購入し、デン･ハーグ行きの列車に乗り込んだ。ちょうど数分前に列車は出発し、スキポール空港に向かい始めた。空港に到着するのは午前9時前であり、その時間帯になれば外も明るくなっているだろう。スキポール空港に向かう列車の中:2019/12/31(火)06:54

5409.【マルタ共和国旅行記】ハウワーの“Klangreihe”の探究:自己と世界との関係

列車は定刻通りに出発したが、辺りは真っ暗闇に包まれており、車窓から外の景色を見ることはできない。やはり車内はいつもより空いており、今乗車している車両には、家族連れの一家と若い女性ぐらいしか乗車していない。

旅、日記、作曲を通じて、自己及び人間存在を究明していくこと。それは一つの重要なテーマとして自分の人生の中にあるということを今朝方改めて思った。今この瞬間には、まさにそのうちの旅を通じて日記を執筆している。そしてこの日記を書き終えたら、列車の中で作曲実践を行う。

2020年は、旅、日記、作曲に従事することをもっと前に進めていこう。より深く、より真摯に、そしてよりくつろいでそれらに従事していく。

昨日書き留めていたように、作曲に関してはいくつか明確な主題のようなものが浮かび上がっていて、それについて絶えず無意識のどこかで考えを巡らせている自分がいる。そうした状態に入ってしまえばもはや何も心配することはなく、引き続き学習と実践を継続させていき、いつかふとした時にそれらの主題に対する自分なりの明確な答えや方向性が見つかるだろう。

音が持つ治癒作用と変容作用の徹底的な探究とその具現化。密教的な観点と神学的な観点の適用。詩的･俳句的な短い形式の中でストーリーを生み出し、そうしたストーリーを媒介させる形で治癒と変容をもたらすこと。そうしたことをぼんやりと考える。

闇によって外の世界が何も見えないのと同じぐらいに、そのテーマについて何か具体的な打ち手があるわけでもない。だが、闇の世界に時折光る街灯のように、今後の方向性のようなものはぼんやりと見えている気がする。

結局今回の旅には、ヨーゼフ･マティアス･ハウアーの作曲思想と作曲技術について解説された“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”だけを持参することにした。アーノルド･ショーンバーグが確率した12音技法については少しだけ進展があり、12個の音の配置の仕方について自分なりに小さなコツを掴み始めているのだが、ハウアーが考案した“Klangreihe（邦訳不明）”についてはまだほとんど何も掴めていない。ハウワーが考案した44個の“trope”を用いてどのように和音を構成すればいいのかが悩ましいところである。そうした悩みを解決するために本書を今回の旅に持ってきた。旅の最終での待ち時間や機内で少しずつ本書を読み返そう。すでに一読していることもあり、再読である今回は少し理解が進むことを期待する。

今、列車の中で音楽に耳を傾けている。自分という人間が、過去未来の人類の確かな部分として存在していることを感じる。これから作曲実践をしようと思うが、その際にも私は過去の作曲家や理論家の仕事の上でそれを行うことになる。そして、自分の実践がいつか誰かの実践の土台になるのだと思う。そのように思うと、この脈々と途絶えることなく続く人類の営みに対して深い安堵感を覚えた。自分という人間の役割がより明確に知覚され、自己の不滅性を実感したことによって、そうした安堵感が生まれたのだと思う。

© YOHEI KATO 2019

自分がこの世界に対して果たすべきこと、果たしたいと思うことが、夜明け前の空に浮かぶ星のように明瞭に輝いている。

真実に、善く、美しく生きること。自分にできる精一杯の生き方、及びあるがままの生き方はそれである。この世界のどこで何をしていようが、絶えず私は私を超えた私として生きていく。スキポール空港に向かう列車の中:2019/12/31(火)07:15

5410.【マルタ共和国旅行記】自己究明を通じた世界究明:原型モデルと音列

自己の究明を通じ、それを反転させることによって、自己以外の全てを究明できないだろうか。そのようなことを考えた。

スキポール空港に向かう列車の中は、外の世界とは対照的に明るい。その明かりは幾分薄ぼんやりしていて、不思議な意識状態へといざなう。

明るい列車と暗い外。列車の中が明るいがゆえに外が暗く知覚され、外が暗いゆえに列車の中が明るく知覚される。ある対象物を知ることが、実はある対象物以外のことを知ることにもつながっているのではないだろうかという気づき。つまり、自己の存在を知れば、自己以外の存在についても知れるのではないかということである。

最近私の関心として浮上していた自己を究明するという点は、結局自己を知ることを通じて、自己以外の全てを知ることなのではないかと思わされたのである。自己を徹底的に知れば、自己以外の世界全体ないしはこの宇宙全体を知ることにつながりはしないだろうか。自分を知ることによって自分以外の全てを知れるのであれば、自己の究明に向けた道を歩いていくより積極的な意味が見出せる。

つい先ほど、1曲ほど車内で曲を作った。スキポール空港まであと1時間ほどあるから、もう1曲作ろう。

原型モデルをいくつか作成したおかげで、音の配置に集中できている。原型モデルがなかった時は、自分で一から絵具を作り、その絵具を用いて絵を描いていたようなイメージである。すでにもう

絵具は準備されており、今はそれを使って絵を描くことに集中できている。別の表現で言えば、以前は彫刻の材料から自分で作っていた感じなのだ。今はもう彫刻を作るための材料が手元にあって、あとは造形に集中していけばいい。今後は、自分で準備した絵具や材料を使って、絵を塗ることや彫刻を造形していくことにより集中していこう。旅から戻ってきたら、また少し原型モデルの数を増やしていく予定だ。

昨日、12音技法を活用して曲を作った時に、そういえば大抵この手法を使った時には紫がかった色が知覚されることに気づいた。深い緑や青の時もあるが、いずれにせよ赤い感じや黄色い感じの曲はまだ作れていない。もちろんそれは私がまだこの技法に習熟できていないからかもしれないため、今後はこれまでにない色を12音技法で作っていく実験をしてみよう。それに加えて、12音技法で用いる数列をまた新しく作ってみようと思った。その際には、“The Secret Code：The Mysterious Formula That Rules Art, Nature, and Science（2008）”に掲載されている神秘的な数字活用してみようかと思う。また、今回ミラノではレオナルド･ダ･ヴィンチ国立科学技術博物館に足を運ぼうと考えており、ダ･ヴィンチが使った意味のある数字などがあれば、それを参考に音列を作成してみたいと思う。

いずれにせよ、自分なりに意味を持たせた音列を作成していく。そこから、自分の作為を越えた音の世界を生み出していきたいと思う。時刻は午前8時を迎えて、今ようやく辺りが明るくなり始めてきた。スキポール空港まであと1時間弱である。スキポール空港に向かう列車の中：2019/12/31（火）08:10

5411.【マルタ共和国旅行記】マルタ共和国に到着して

マルタ共和国に無事に到着し、今私はセントジュリアンのホテルの自室にいる。マルタに初めてやってきたこともあり、あれもこれもと書きたいことが山積みになっているが、全てを一度で書き切ることは到底できないため、マルタに滞在しているこの数日の間にゆっくりと書き留めておきたい。

大変どうでもいいことかもしれないが、マルタは思っていた以上に寒いではないか。確かに、外気だけ比較してみれば、フローニンゲンの倍以上温かいのだが、体感としてマルタの方が寒く感じられてしまうぐらいだ。先ほど近所のスーパーに夕食を買いに行った際にもマフラーが必要であり、マル

タの寒さには拍子抜けをしたのと同時に、暖かい格好をしてきてよかったと思う。マルタに訪れた後に足を運ぶ予定のミラノは随分と寒そうであり、フローニンゲンよりも最低気温が低い状態が続いている。マルタもミラノも思っていた以上に寒そうなのだが、とにかく晴れであることは喜ぼう。

2020年をマルタで迎え、1/4（土）の出発の日まで晴天が続く。偶然にも私がマルタを去った次の日から2日連続でマルタは雨となる。ミラノに関しても週間予報の表示範囲を見ていると、私が滞在している最初の方の天気は晴天に恵まれるようだ。旅の最中の私は本当に天候運に恵まれており、それについて感謝しなければならない。先日のヴェネチア旅行の際には水害の直接的な被害に遭ったばかりであるが、その時も命を落とすことなく今このようにして生きているのだから、それはそれで本当に運の良いことだったのだと改めて思う。

今、ホテルの室内が寒いため、暖房を付けようと思ったが、暖房がうまく作動しない。正直なところ、寒いことが前提で設計されているオランダの家の方が、温暖なマルタよりも室内が暖かい。ホテルの部屋の暖房がつかないので、仕方なく備え付けのブランケットを棚から引っ張り出してきて、今暖かい紅茶を入れた。それを飲みながら、暖かい格好をして少しばかり続きの振り返りをしよう。

寒さについて小言を述べていたが、マルタの空港に到着する少し前からマルタ島全体を眺めていた時の景色がとても印象に残っている。それはこれまで見たことのない景観を放っており、長大な歴史を持った地中海気候のこの国の不思議さに心を打たれた。島を囲む断崖絶壁の光景は圧巻であり、外から人を寄せ付けない厳しさのようなものと同時に、島から安易に外に出させない厳しさのようなものを感じた。島内を眺めると、緑が豊かであり、棚田のようなものもしばしば見えた。飛行機の窓からぼんやりと島を眺めながら、「あの農地でオリーブか何かを栽培しているのだろか」と思った。機内からの景色で言えば、忘れることができないのは、アルプス山脈の絶景である。

本当に偶然なのだが、アムステルダムを出発する際に、太陽の光が眩しくて機内のブラインドを降ろしていたところ、出発してしばらくパソコンで仕事をしていて休憩がてらブラインドを上げた時に、偶然ながらアルプス山脈の真上にいたのである。最初私は、真っ白の雲の塊が眼下に見えているのかと思ったが、それがすぐに雪の積もった山脈であることに気づいた。真っ白で雄大な山々に見惚れてしまい、私は我を忘れて景色に没頭していた。まさにここ最近主題として挙がっていた没我の状態であった。

© YOHEI KATO 2019

アムステルダムからマルタへは2時間半ほどのフライトであり、本当にあっという間であった。時を忘れ、時を超越した日々を、マルタのみならず、引き続き世界のどの場所でも過ごしていく。マルタ共和国:2019/12/31(火)20:06

【追記】

ホテルの自室の暖房がつかないために色々と工夫して寒さを凌いでいたが、それではにっちもさっちもいかなくなってしまったので、先ほどホテルの受付の女性に事情を説明したところ、部屋のドアが開いている場合には暖房がつかないとのことだった。部屋のドアが開いているはずなどないと思ったが、自室に戻って部屋のドアを念入りに閉めたところ暖房がついたではないか。

外に面している窓を最初に閉めようとしたのだが、それは最初から当然閉まっており、そもそも受付の女性は窓ではなく、「ドア」という単語を使っていたため、まさかと思って部屋の入り口のドアの鍵を閉めたところ、突然暖房の電源が入った。なんと私は、今朝まで部屋に鍵をかけずに過ごしていたようだった。いずれにせよ、問題が無事に解決してホッとしている。もう少ししたら、ホテルを出発して、スリマの方へ散歩に出かけよう。新年初日の散歩であり、海岸線を歩くことはさぞかし爽快だろう。マルタ共和国:2020/1/1(水)11:24

5412.【マルタ共和国旅行記】ホテルの自室で思うあれこれ

暖かい紅茶のおかげで少し身体も温まった。身体を温めながらふと思ったが、マルタのホテルは意外とシャワーしかないところが多く、今実際に私が宿泊しているホテルにも浴槽がない。現在宿泊しているホテルはそれなりに良いホテルであり、外観と内装も見事なのだが、浴槽はない。

ホテルの近くにオーガニック食材を購入できるスーパーがあり、その他の観点からも立地的に良かったためにこのホテルにしたのだが、やはりゆっくりと浴槽に浸かっていないと身体がすぐに冷めてしまうのだと改めて実感した。私は夏でも浴槽に浸かっており、最後に浴槽に浸からなかった日がいつなのか思い出せないほどである。もう長い間、浴槽のない家には住んでいないし──過去にシャワーだけの家はなかったように思う──、旅先のホテルでも常に浴槽のあるところにしか宿泊しないようにしている。だがマルタは温暖であるという気候的な面で、シャワーしかないホテルが多いというのは仕方ない。

夕食前に少し熱めのシャワーを長く浴びていたのだが、やはりそれは浴槽に全身を浸けるのとは全く保温効果が違う。そして何より、心身のくつろぎ具合が歴然と異なることを改めて実感した。私が日々くつろぎの中で自分の取り組みに従事できているのは、夜にゆっくりと浴槽に浸かっていることも大事な要因なのではないかと思わされた次第である。

シャワーを浴びる前に、事前に調べておいたスーパーに足を運んだ。そこはホテルからほど近く、オーガニックな食材や、マルタ名物の魚介類なども新鮮に取り揃えてあった。私はいつもと同じように野菜と果物をメインに食材を選んだが、今日は久しぶりにチーズを食べることにした。夕食としてはボリューム感のある新鮮なサラダに合わせて、オランダのオーガニックスーパーでも売られている穀物類のクラッカーを購入した。これはプロテインや食物繊維が豊富であり、旅行の際にはオランダから持参することも多く、それと全く同じ商品がマルタのスーパーに置かれていたことは嬉しかった。

それと同じく、普段私が飲んでいるオーガニックの豆乳も置かれており、それも喜んで購入した。買い物から帰ってきて、チェックインを担当してくれた受付の女性に、マルタの水道水は飲めるのかどうかを尋ねてみた。一応スーパーで2Lの水を2本ほど購入していたのだが、念のためその点について確認したかった。すると、できる限り飲まない方がいいとのことであった。マルタを取り囲む海の青さを思った時、てっきり私は水道水も綺麗なのだろうと思っていたが、飲まない方が良いというのは意外であった。自室に戻ってホテルの案内ブックを読むと、確かに水道水は飲まない方がいいと書かれてあった。

大晦日の今日、現在滞在中のセントジュリアンエリアではなく、ヴァレッタの方では年越し花火があるそうであり、その騒ぎを避けてセントジュリアンに宿泊することにしたという背景がある。オランダでの年越し花火の騒音を避けてマルタにまでわざわざやってきたのだから、マルタで花火の騒音に遭遇しては元も子もない。有り難いことに、今宿泊しているホテルの周りはとても静かだ。実は私はオーシャンビューを期待していたが、オーシャンビューどころか、宿泊階は1F（イギリス式のため、日本の感覚であれば2F）であり、街の景色を眺めることすらできない。というよりも、部屋の窓はホテルの別棟に面しており、その別棟しか見えないという状況で、イギリスの哲学者ジェレミ・ベンサムが開発した全展望監視システムの牢獄「パノプティコン」を想起させ、思わず笑みがこぼれてしまう。

マルタの街の景色は、実際に明日、自分の足で歩くことによって十分に堪能しよう。新年の明日は散歩をするだけに留める。美術館にも博物館にも歴史的建造物にも行かない――どうせ開いていないのだから――。明日は昼過ぎまでホテルの自室でゆっくりと過ごし、午後に仮眠を取った後にでも、ただ海岸沿いに沿って散歩を楽しみたいと思う。地中海気候の風と太陽光を浴びながら、2020年最初の日は、マルタ島の海岸沿いを散歩することを存分に楽しむ。マルタ共和国:2019/12/31(火)20:39

5413.【マルタ共和国旅行記】マルタで迎えた新年の朝に

時刻は午前3時半を迎えた。今朝の起床は3時過ぎであり、起床直後にシャワーを浴びた。

いよいよ2020年を迎え、今朝はなんだかとても嬉しい気持ちだった。「嬉しい」と表現してしまうとどこか稚拙かもしれないが、本当に純粋な嬉しさがあった。子供のように純粋無垢な気持ちで何か特定の日の到来を喜ぶような気持ち、例えば、遠足に出かける日や、プレゼントを期待してクリスマスを迎えるかの如く、純粋かつ大きな喜びの感情が起床直後にあった。そしてそれは今も自分の内側に流れている。

歳を重ねて行けばいくほどに、確かに自分自身や世界に対して僅かばかり分かることが増えてくる。だがそれは自分にとって、歳を重れば重ねるだけ、子供のように純粋な心を思い出す度合いに比べて小さなものである。これは大変興味深いことだ。歳を重ねることによって、自己及び世界を知ることよりも、童心性の獲得ないしは回復の方が度合いが高いのだから。

2020年を迎えた今年は、何か途轍もなく大きな意味を持つような年になるような気がしている。こうした気がしてしまったのだから、本当にそうなるだろう。今年は確実に、自分にとって極めて大きな意味を持つ年になる。そうした年になるというよりも、今日からもうその年は始まっているのだから、今この瞬間にも大きな意味の一端が開示されていると考えた方がいいだろう。そう考えた方が実態に即しており、より正しい。

今年が際限無く大きな意味を持つだけではなく、それと同じぐらいの大きさの変容を経験する年になるような気がしている。ここでもまた、そうした気がしているのだから、それは起こるべくして起こる

だろう。今年は、巨大な意味の惑星が自分に衝突する年であり、それと同時に宇宙空間に飛び出すような変容の年になる。そのようなことを起床してすぐの今に思う。

時刻はまだ午前4時前だから初日の出は見えない。昨年までは毎年日本に一時帰国し、初日の出は実家で拝んでいた。今年はマルタ共和国でそれを拝む。今日のマルタの最高気温は14度、最低気温は11度とやはり気温上は暖かい。体感としては寒く感じられるため、散歩に出かける際には暖かい格好をしていこう。

マルタに滞在の4日間は軒並み晴れであり、観光を積極的に楽しむにはうってつけの天気である。自分の運の良さそのものに対して、そしてそうした幸運を授けてくれる存在に対して感謝をしたい。

今年においても日々感謝の念を捧げることを忘れない。日々は感謝の念を捧げながら進行していき、徐々に深まっていく。そして、感謝の念を捧げれば捧げるだけ、日々創造活動に没頭することが可能になり、充実感と幸福感が増していく。2020年をこのような気持ちで迎えられたことをとても嬉しく思う。

日々が絶えず充実感と幸福感の増大過程の中で進行していき、絶えず自己及び世界に関する新たな意味が自分の目の前に開示される過程の中で進行していく。そんな毎日を今年も送っていきたい。マルタ共和国:2020/1/1(水)03:56

5414.【マルタ共和国旅行記】成熟と若返りの同時進行過程の中で

今、静かな音楽をかけながらこの日記を執筆している。滞在先のマルタのセントジュリアン地区はリゾート地で有名であり、近くにはカジノなどもあるため、最初は騒音などがないかを心配していたが、それは完全に杞憂に終わった。フローニンゲンの自宅周辺にも劣らないぐらいの静寂さが、滞在先の周辺にはある。この点についてもまた感謝をしたい。

旅先でもなるべく食生活を変えないようにしており、今はフローニンゲンから持参した小麦若葉を飲んでいる。いつもは水でふやかしたチアシードと共に小麦若葉のドリンクを作っているのだが、チアシードは持参していない。小麦若葉は最強のデトックス効果を持つ植物だと言われていることにつ

いて先ほど改めて考えていた。毒が混入した物質と情報でまみれた現代社会において、毒を食らってしまうのは残念ながら避けられない。ただし、毒を蓄積しすぎていては心身の病に陥ってしまう。そうしたことから物質次元と精神次元でのデトックスを心がけていくことは大切である。一方で、毒物の摂取が避けられないものだとは言え、少し自覚をすれば、随分と毒を摂取することを避けられることは確かであるから、そもそも毒を心身に取り入れないことが肝要であるように思う。2020年を迎えた今年においても、できるだけ心身を浄化し、心身が健康のまま、いやより一層健康度合いを増していく形で日々を過ごしていこうと思う。その一つとして食実践や運動がある。それらを行いながら、時の不可逆性に抗う形で、日毎に若返りを果たしていこう。

ここ最近は、成熟と若返りは表裏一体であり、それらは足並みを揃えて起こっていくものなのではないか思っている。今年はまた一つ歳を取ることになるが、それは成熟への一歩であり、同時に若返りの一歩でもある。二つの矛盾が無矛盾な形で人生に組み込まれているということ、それを自覚し、それを日々体感しながら生きていく。

今この日記を書いているこの瞬間においても、時は流れ、時は止まり、成熟と若返りの二方向的な現象が同時に自分の内側に生起している。そのように考えてみると、もはや成熟も若返りなども存在せず、自己はそれを超越する形で存在していると言えるのかもしれない。なるほど、自己は成熟にも若返りにも左右されない場所で生きているようなのだ。自己は成熟や若返りが及ぶ系の中で生きていないのである。

新年を迎えた今日は、ホテル近郊をゆっくりと散歩したい。昨日は散歩する時間はなく、夕方にホテルに到着したため、近所のスーパーに行くだけとなった。今日は美術館や博物館などには行かず、セントジュリアンの海岸沿いを歩いていき、スリマの方へ向かう。スリマの海岸線にある歴史的建造物の一つである灯台を目安に歩いていく。

昨日マルタに到着して、この国の大地が他のヨーロッパ諸国にはない色をしていることに気づいた。私は地質学者ではないので詳しくはわからないが、土の色が独特であり、空港からホテルに向かうバスの窓からは、独特の色を持つ岩石をよく見かけた。実際に、マルタには独特な石造りの住居や建築物が多いことにもすぐに気づいた。そうした土地的な気づきと共に、やはりマルタは金融立国の一つであることも実感した。

© YOHEI KATO 2019

ホテルの自室に置かれているマルタのガイド誌を眺めていると、金融や税務に関する話が多いように感じた。マルタはタックスヘイブンであり、様々な国の人々や企業を金融や税金の観点から受け入れようとしていることが伝わる。近年においては、ブロックチェーン技術の導入も税制面を含めて積極的であり、それに関する記述もガイド誌の中にあった。

まだマルタに来て1日しか経っておらず、マルタのことはほとんど何もわかっていないに等しいが、個人の税制面で優遇があることや、気候が地中海気候のために一年を通して温暖であったとしても、自分にとって最適な居住地かというと、今のところはノーである。

自分の名前である「洋平」の「洋」は海を連想させ、確かに私は海に大変惹かれるものがあり、マルタには海があるという点においても魅力的だが、どういうわけか、森などが近くに感じられるフィンランドが今後の居住地の第一候補として揺るがない──もしノルウェーがEU諸国であったならばノルウェーも候補に入ってきていたと思われるが──。

少し発想を変えて、そもそも居住地を一つにする必要はなく、人生の最後の時期を迎えるまでは、複数の居住地を持って置くのが自分には合っているかもしれない。フィンランドとオランダを起点にして、マルタが最も輝く季節にマルタに滞在するというのも良いかもしれない。そのようなことをぼんやりと考えていた。マルタ共和国:2020/1/1(水)04:31

5415.【マルタ共和国旅行記】元旦の誓い

瀬戸内海と地中海の違いがわかるようになること。瀬戸内海と地中海が同じであることがわかるようになること。しかもしれらを体感的･存在的に把握すること。それが元旦の一つ目の誓いだった。そしてもう一つは、近い将来にマルタに居住用物件を購入しようという誓いが生まれた。

2020年を迎えた最初の日、マルタは晴天に恵まれ、これ以上にない素晴らしい天候であった。ホテルの部屋にいた時は寒さを感じたが、13時過ぎに散歩に出かけてみると、ポカポカとした陽気を感じ、気分がすぐさま高揚し始めた。ホテルから出た時の私は、もう好奇心の獣か神に捕らえられていて、目に映る全てのものが新鮮に思えた。生まれたての赤ん坊が外界に対して感覚を開き、外の世界の情報を体内に吸収していくような感覚があった。

マルタはこれまで訪れた他のヨーロッパ諸国とは比べることのできない特徴を持っている。これが地中海に面した国なのだ。海に囲まれ、孤島であるがゆえに育まれた独特な文化がここにある。

当初私は、目安にしていた海岸線に面した教会まで歩き、そこからホテルに引き返そうと思っていたのだが、結局往復3時間近く歩いていた。セントジュリアンのホテルから海岸線に沿って歩いていき、スリマのエリアの端まで歩き、明日訪れるヴァレッタを見ることのできる場所まで歩いていた。何が私をそこまで歩かせていたのかは定かではないが、無心で歩いていた自分がとにかくいたのだ。「無心で」と書いたが、実際には昔のことを色々と思い出したり、これからの歩みに思いを馳せていた。

完全に意識が拡張しており、マルタにいるという感覚を保持しながらも、時空間は完全に超越的なものとなり、青空にポッカリと浮かぶ白い半月に私はいて、そこから地球上のマルタにいる自分を眺めているような感覚を持った時間があった。それは瞬間的なものではなく、しばらく続いていた。

昨日の日記で書き留めたように、マルタの水道水を飲むことは推奨されていないが、やはりマルタの海は綺麗だった。波打ち際まで近づいてみたときに、透き通る海の水に感銘を受けた。

一つ興味深かったのは、やはりこの島の断層の質なのか、海岸線の岩の種類や形が特徴的だったことである。少なくとも、私の実家の目の前の瀬戸内海とは随分と違う質を持っている。そこから私は突発的に、海を拝める家を2つ所有しようと思った。1つは両親が所有するマンションを将来引き継がせてもらう。私は両親のマンション以上に寛げる場所を知らない。バルコニーから穏やかな瀬戸内海を眺める時が、最も落ち着ける。それは今でも変わらない。そしてもう1つの物件は、マルタで所有することにした。そこから私はすぐに行動に移し、海岸線沿いの不動産屋に片っ端から足を運んだ。

元旦から何をしているのかと自分でもおかしく思えたし、そもそも元旦に開いている不動産屋は一つもなく、私が行っていたのは不動産相場を調べるために、不動産屋の窓ガラスに張り出されている様々な物件を眺めることであった。一つ、スリマのエリアにある“Perry Estate Agents Malta”という不動産屋は、様々な不動産屋の中でも一番質の高いサービスを提供していそうだと外観からすぐにわかり、店の外に置かれていた無料で持って帰ることのできる冊子を2冊もらって帰ってきた。1冊

は2018-2019年の取り扱い物件情報がフルカラーで掲載されているものであり、もう1冊は2019-2020年のものである。

もちろんピンからキリだが、マルタは思っていた以上に不動産価格が安いように思えた──それとも私の感覚がおかしいのかもしれない──。子供がいなくて夫婦2人であれば、日本円にして6千万円ぐらいあれば十分に良い物件が買える。仮に私に妻がいれば、ベッドルームとバスルームはできれば分けた方がいいように思うのだが、2つのベッドルームと2つのバスルームがあって、オーシャンビューの広々とした家（マンション）がそれくらいの価格で購入できてしまう。エリアをセントジュリアンにしなければ、それくらいの価格で3つや4つのベッドルームがあり、バスルームも3つ以上のところもある。1億円を出せば贅沢な物件が購入でき、2億円弱出せば贅沢すぎるぐらいの物件が買える。オーシャンビューの家ではないが、2億円弱で農場かつ7つのベッドルームがある物件が売りに出されていて、内装がマルタの文化を思わせてくれるものであり、とても興味深く思った。

ここまでのところ、居住用不動産について書き留めていたが、不動産を賃貸する場合にも、セントジュリアンエリアでさえ十分に割安な価格に思えた。少なくとも、今自分がフローニンゲンで支払っている家賃を出せば、一番地価が高いであろうセントジュリアンでも十分な機能と広さを持った物件を賃貸することができてしまう。

スリマのエリアを散策しながら不動産屋を見つけるたびに店の窓ガラスに近寄って、その周辺の物件相場について理解を深め、それと同じことをセントジュリアンエリアに戻ってきてからも行っていた。元旦からそれほどまでにマルタの不動産に関心を持ったのは、昨日から朝令暮改をし、この場所は今後の自分の生活拠点として何か望ましいように思えたからである。それは直感的なものであり、海を愛する自分に響くものがマルタにはある。どことなく瀬戸内海を思わせるような穏やかな海があり、カリフォルニアを思わせるような今日のような青空があり、冬でもこうした陽気な雰囲気があると、それはやはりこの場所を気に入ってしまうのも無理はない。

海の近くの物件を将来2つ所有するだけではなく、またしても突発的に、森の中あるいは森にほど近い家も2つほど所有しようと思った。そのように書くと自分の所有欲は強いのかもしれないと思ったが、決してそうではなく、私は単純に海や森が好きなのであり、それらを感じながら毎日落ち着いて自分の人生を過ごしたいのである。森に関する家は、1つはフィンランド 、もう1つは日本の長野か

和歌山あたりが良いかと直感的に思った。私の頭の中は将来の居住地で一杯であったが、アワー・レディー・オブ・マウント・カーメル協会の前を通りかかった時、「自分は死に場所を探しているのかもしれない」という想念が突然湧き上がった。 実はそれは以前からも多少なりとも気付いていたことではあった。だが、まさかそこまで明示的な言葉で自分の頭の中に浮かぶとは思っておらず、それを受け止め、近い将来にマルタを含めた場所での不動産取得に向けて準備を進めていく。マルタ共和国：2020/1/1（水）16:34

5416.【マルタ共和国旅行記】2020年最初の夢

時刻は午前3時半を迎えた。今朝は3時前に起床して、これからゆっくりとマルタでの活動に向けて準備をしていく。準備と言っても日記を書くことと作曲をすることであり、それらに加えて本日訪れる場所をもう一度確認しておくぐらいだ。

そういえば、昨日は印象に残っている夢を見なかった。一方で、今朝方は少々印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、四方が壁で囲まれ、その壁に様々なオブジェが埋め込まれた不思議な空間にいた。雰囲気から察するに、そこは欧州の国のどこかに思われた。ただし、その空間には日本人だけしかおらず、小中高時代の友人が数多くいた。

最初私は、修学旅行の一環か何かでそこにいるのだと思っていた。私たちはその空間の入り口近くで整列をしていた。何列かある中で、私はある列の先頭に立っていた。すると、係員の日本人男性がやってきて、今から列の先頭の人が代表として、自分自身にまつわる秘密を壁のオブジェに記憶させることを依頼してきた。列は10列近くあったから、10人ぐらいが壁に向かって歩き出した。係員の男性は別に何も難しいことを言っていなかったように思うが、秘密を壁に記憶させる手順が私には難しく思えた。自分はつくづく何かの手順を理解する力が弱いのだと思った。

各列の先頭にいた者たちは、思い思いに壁のオブジェを眺めていき、自分の秘密を託すオブジェを慎重に選んでいた。私もその1人であり、どのオブジェにするかとても慎重だった。その空間はだだっ広く、壁にはぎっしりとオブジェが埋め込まれていたため、どのオブジェにするかを選ぶのは一苦労だった。しばらくすると、少しずつ周りの人たちがオブジェを選び、パスワードをかけながらオブジェに自分の秘密を記録させ始めた。1人、また1人と少しずつオブジェに秘密を記録させ終えた人

たちが出てきた。私はまだどのオブジェにするかを悩んでいる最中であり、一向に良いオブジェが見当たらなかった。最初から私は少し違和感を覚えていることがあった。それは何かというと、基本的に選べるオブジェは自分の目の高さまでということである。

壁には下から上までオブジェがぎっしりと埋まっているのに、なぜ自分の目の高さまでのオブジェしか選べないのか、正直私は不満であった。そうした不満を他の列の先頭の人たちにも打ち明けたが、彼らは一様に「それはしょうがない」と言う。私はそれはしょうがないはずがなく、理不尽のように思えたため、係員にも確認したが、係員の回答も曖昧なものであった。そこで私は、誰が作ったのかわからないようなそんな決まりを守ることなく、自分がこれだと思ったオブジェを選び、そこに自分の秘密を記録させることにした。ひとたびそのように吹っ切れると、オブジェの候補がいくつかに絞られてきた。

あるところで、自分の目線よりも高いオブジェに手を伸ばし、そこに秘密を記録させようとしたところ、右から誰かが私の方に寄り掛かってきて、私の靴を踏んだ。見ると、同じぐらいの高さにあるオブジェを選ぼうとしている小柄な女性が、背伸びをして体のバランスを崩してしまい、私の方に寄り掛かってきたことがわかった。私はその女性の体を支え、「大丈夫ですか？」と確認した後、私たち2人だけが決まり事を気にせずにオブジェを選んでいることに対して笑った。その女性と二、三言葉を交わした後に、私は結局その場所で秘密を記録するのではなく、また別のオブジェを探し始めた。

壁のオブジェには様々なジャンル分けがなされており、オブジェの見た目はジャンルを想像させるわけではそれほどなかったが、そこでふと、「音楽のジャンルはどこだろうか？」と考えた。近くにいた人に尋ねてみると、音楽のジャンルの場所を教えてもらうことができ、私はそこに向かった。その手前のジャンルがゲームとなっており、私はそこで一度足を止めた。見るとそこには、私が幼少時代にのめり込んでいた懐かしのRPGゲーム（クロノトリガー）のソフトが地面に置かれていた。厳密には、地面にガラス張りのケースがあり、そこに大事そうにソフトがいくつか保存されていたのである。そのゲームのソフトは、私がやっていた当時の見た目とは異なり、復刻版のように見えた。特典としてその他の日本を代表するRPGゲームが2つセットになっており、私はそれを手にとって眺めてみたくなった。だが、それはガラス張りのケースの中にあって、ケースには鍵がかかっていたため、外から眺めるしかなかった。しかし幸いにも、私が熱心にそのソフトを眺めていることに気付いた係員の1

人が、ガラスケースを開けてくれるとのことであり、私は嬉しくなった。ケースが開けられ、少しかがんでソフトを手に取ろうとした瞬間、私は思わず悲鳴を上げた。誰かが私のお尻にかんちょうをしたのである。

見ると私の右横には、どこかで見覚えのある芸人らしき男性がいて、彼が手持ちのスティックで私にかんちょうをしてきたことに気づいた。それは悪ふざけであり、そのかんちょうのせいで、尾骶骨が痛くなってしまった。その男性はニヤリと笑みを浮かべており、してやったりの表情をしていた。私はその男性になぜかんちょうなどしてきたのかを尋ねようとしたが、その男性に関わるのがもはや無駄に思えたため、尾骶骨をさすりながらその場を後にして、音楽関係のオブジェの場所に向かった。

音楽関係のオブジェが埋め込まれた壁の前に到着すると、そこには良さそうなオブジェがいくつもあり、ようやく自分が望むオブジェがありそうだと思って安堵した。ところが、もうその場を去らなければならない時間が目と鼻の先までやってきており、気がつけば私はその空間とは違う場所にいた。私はどのようなオブジェを最終的に選び、自分の秘密をどのようにオブジェに埋め込んだのかは知らない。ただし言えることは、自分が納得したオブジェを選んだことだけは確かな実感としてある。

この夢のシンボルとして現れていた不思議な空間と無数のオブジェは大変興味深い。また、自分の秘密をオブジェに埋め込む行為とその方法も何かの象徴して現れていたように思う。そして私が音楽関係のジャンルのオブジェを選んだことにも何か大切な意味がありそうだ。

ここ最近、ヨーゼフ･マティアス･ハウアーのトランスパーソナル的な作曲実践に共感をするものがあり、彼に共鳴をする形で、とりわけ私は数秘的な観点で作曲をしていこうと思っていたところだった。もちろん数に関する秘密だけではなく、人間の言葉に内包された密教的かつ神学的な観点の活用や、曲の中に物語構造を持たせて、物語と物語構造の双方がトランスパーソナル的な作用を引き起こす工夫について考えていたところだった。昨夜もそれについて意識的･無意識的にずっと考えていたように思う。また、スティックを使ってかんちょうをされた場面についても印象に残っている。それは痛みが伴い、自分の尾骶骨がしばらく疼いているのを感じていた。尾骶骨あたりにはムーラダーラチャクラというエネルギーの中心点があり、そこには生命力の根源であるクンダリニーが眠っているとされる。ひょっとすると、あのうずきはクンダリニーの目覚めを表していたのかと思う。マルタ共和国：2020/1/2（木）04:41

5417.【マルタ共和国旅行記】使命・天命

気がつけば元旦が過ぎ、2020年も2日目を迎えた。マルタで迎える3日目の今日も、行うことは変わらない。もちろん今日から本格的に観光を始めるのだが、結局は日記の執筆と作曲、そして旅が自分のなすべきことである。それらはもう完全に「職業(vocation)」になった。英語の語源ではそれは、特定の職業に関して神から召されたとされる使命や天命を指す。作曲なら世間一般的にまだしも使命や天命とみなされるようなものかもしれないが、そもそも作曲ですらも、音楽経験の一切ない私にとってはそれが使命･天命としての職業だとみなしているのは不思議なことである。また、日記や旅をすることが使命･天命としての職業だというのは、それ以上に不思議に思えるだろう。だが私には、もう本当にそれらが自分の使命･天命であることが分かっている。確信を超え、確信は存在の大空の中に溶け出してしまった。元旦のマルタの青空を眺めながら、そのようなことを考えていた。

昨日の散歩は大変実り多いものだったと思う。マルタに居住する意思が強くなったこと、自分の名前と海との深いつながりに気づけたこと、創造活動上の種々のヒントなどを得られたことが大きな恵みであった。恵みとしての気づき。それが流れ星のように降ってきて、私はそれらを受け止めた。

陽気な午後のマルタの空の向こうには、白く輝く半月が浮かんでいた。

言葉と音の創造活動を通じて、全人類の治癒と変容に関与できないかと考えていた。それを通じて、この惑星全体の治癒と変容につながるのではないかという考えが芽生えた。

この惑星の生態系を破壊する最大の根源としての人間。自分を含め、人間の治癒と変容は急務の課題として地球にのしかかっており、その課題に対して自分なりの貢献を自らの創造活動をもってして取り組んでいこうという思いがあった。マルタやフィンランドに居住地を構えるのもその一環なのだ。そんなことは誰も分からず、分かりようがなく、また分かる必要もない。自分だけが分かっていればそれでよく、淡々とその日その場所で自らの取り組みに従事し続けることが大切だ。

地球全体に関与していくことが他の惑星にどのような影響をもたらすのかはまだ分からない。今の自分の視野はそこまでは及ばない。せいぜいこの惑星どまりだ。現段階ではそれは仕方のないことかもしれない。視野の射程は、当人の意識の発達段階に依存するのだから。

意識を拡張させていく実践には、これからも静かに取り組み続けていこう。それをする個人的な意識は随分と希薄になっているのだが、それに向かわせる力が自分の背後に働いていて、作為の無い純粋実践を行っている自分がここにいる。

身体感覚も存在感覚も日ごとに変容し、意識がどんどんと拡張されていく。マルタを取り囲む大洋のようにそれは拡張されていき、マルタ上空の大空のように無限に広がっていく。大空の外は開かれており、それは宇宙空間につながっている。

自分の意識が宇宙大になっていく。地球から月を見ていた自己と、月から地球を見ていた自己の完全なる一致。奇妙なことに、地球と月の双方に自分がいて、それぞれがそれぞれを眺めていた感覚が昨日の午後の散歩中にあった。そしてあるところで、地球と月の上の2人の自己は重なり合い、重なり合ったところでマルタの道路に融解結合した。

文字通り、毎日毎日変わっていく自己。自己はその変容の速度に押し潰されることなく、平静を維持しながら呼吸をしている。

旅、日記、作曲。それらのためにはもう手段を選ばずに全てを捧げていく。生活を今よりもずっと極端化させていき、使命･天命に没頭することを通じて、この惑星に関与していく。魂を売るというよりも、私は自分の魂を差し出し、献上する形で日々の取り組みに従事していく。マルタ共和国:2020/1/2(木)05:13

5418.【マルタ共和国旅行記】ヴァレッタ観光に向けて: 今朝方の夢の続き

本日より、マルタでの観光を本格的に始める。ホテルで朝食を摂った後に、午前中の早い時間帯から観光を始める。今日はまず最初に、ヴァレッタにある国立美術館に行き、その後にすぐ近くの聖ヨハネ大聖堂に足を運ぶ。そこでは、今回マルタに行くことを決断させるきっかけとなったカラヴァッジョの絵を多く見ることができる。国立美術館と聖ヨハネ大聖堂でどれほど時間を過ごすか未定だが、午後からは国立考古学博物館に行き、謎に包まれたマルタ文明の一端を少しでも理解したいと思う。普段の旅では一日に一ヶ所だけ美術館や博物館を訪れるようにしているが、本日訪れ

る美術館や博物館はそれほど大きなものではないらしく、また何よりも今回はそれほど長くマルタにいられるわけではないので、今日は午前中から活動を始め、それら3箇所を巡りたいと思う。

セントジュリアンに戻ってくるのは夕方あたりになるだろうと思われるため、ホテルの近くのバス停で下車した後に、一昨日に訪れたスーパーで新鮮な野菜とチーズを和えたサラダと、タンパク質と食物繊維が豊富な穀物クラッカーを購入してそれを夕食にしよう。

本日の計画について書き留めたときに、ふと今朝方の夢の続きを思い出した。四方を壁に囲まれた空間から瞬間移動した後に、私は空港にいた。実は先ほどの空間と空港は繋がっており、今から私はどこか別の国に行くために飛行機に乗る必要があるようだった。動く歩道に乗って、私は搭乗が迫っているゲートに向かった。すると突然、私の体は空港の外にいて、雨の中を学校に向かって走っていた。目的地は高校かどこかだろうか。

見覚えのある山道を走っていると、後ろからやってきた車の運転手が私に話しかけてきた。見るとそこには、小中高時代の友人(YK)がいて、車に乗らないかと声を掛けてくれた。幾分雨も強かったので、私は彼の申し出を有り難く思ったのだが、なぜか私はそれを断った。雨に濡れながらも走って目的地に向かいたいという思いが私の中にあったのだ。彼は納得した表情を浮かべ、彼の車は山道の向こうに消えていった。その他にもこの夢と前後して、空港のターミナル間を移動するバスに乗ろうとする場面があったのを覚えている。バスに乗ろうとした時に、アフリカ系の運転手に身体チェックを受けた。特に何の問題もなくバスに乗ることができた場面があった。それ以外にもいくつか小さな夢の断片があった。

それではこれから作曲実践を行いたい。1時間弱ほど作曲実践を行ったら、今日は早めに朝食を摂ろうと思う。朝食後、自室で少し休憩したらホテルを出発し、いよいよヴァレッタの観光に向かう。今日も天気に恵まれるようであるから、なお一層充実した1日と感じられるだろう。マルタ共和国:2020/1/2(木)06:06

5419.【マルタ共和国旅行記】ヴァレッタの国立美術館と国立考古学博物館を訪れて

昨夜は9時頃を迎えた時に激しい睡魔に襲われ、いつもより早く就寝することにした。旅の最中は午後に仮眠をとることが難しいため、夕食を食べてしばらくすると、どうも眠くなってきてしまう。夕食

の種類も量もフローニンゲンのそれらとは若干異なることも眠さを引き起こしている要因の一つかもしれない。いずれにせよ、今朝は午前4時前まで眠っていたこともあり、睡眠は十分過ぎるほどに取った。マルタでの滞在4日目の今日も十分に活動的になれるだろう。

昨日は、ヴァレッタにある国立美術館と国立考古学博物館に足を運んだ。どちらも比較的小さかったが、展示されている品々をゆっくり見ることができた。とりわけ印象に残っているのは、国立考古学博物館を訪れた時に、マルタ文明がエジプト文明やメソポタミア文明に劣らないほどの歴史を持っており、展示物を見た時に、人間は創る生き物であるということを改めて思ったことだった。

様々な意図を込めて作られた品々を見ていると、時空を超えて、展示ガラスのガラス越しに、作り手の意図や思いのようなものが伝わってくるような感覚があった。どの時代の人間も、取り巻く環境や精神風土の過酷さにさらされていると思うのだが、そうした中にあって、マルタ文明の先人たちは心のゆとりのようなものを持っているように感じられた。余暇を楽しみし、その中で自由に遊びを楽しむような気持ちの中で創造活動に従事していたのかもしれない。

2020年を迎えた今、その時点からマルタの文明を眺めていたことと同じことが、いつか現代に対しても起こるという当たり前なのだが、不思議な感覚を引き起こす現象が生じた。以前どこかの美術館で、通信技術（携帯など）の歴史を俯瞰する企画展物を見た時に、戦後から今にかけてのめざましい発展を見て、数十年前の技術がもはや原始人が使っていたかのようなものに見えてしまうという感覚があった。とりわけ戦後から現代にかけての技術的な進歩はめざましいのだろう。今後も技術が発展し続けていくとするならば、今から数十年後から現代を眺めると、そこでもまた原始的な感覚がするのかもしれない。そうであれば、私が数千年の歴史を超えてマルタ文明を眺めたことを、数千年後の人間が行った時、彼らは私たちの文明の原始性に直面するだろうし、逆に言えば、私たちは絶えずそうした原始性が展開していく過程の中に生きていると言えるかもしれない。

マルタ文明に触れることによって、時間感覚が一気に拡張したような感覚があった。仮に地球が今後もしばらく存在していくと仮定するならば、数百年後や数千年後の人たちが現代の私たちの生活風景を見てどのように思うのか大変気になることである。特に現代社会の抱える問題や常識については、さぞかしい言いたいことがたくさんあることだろう。逆に、私たちが未来人の観点を持てば、現代の課題や常識の枠組みを乗り越えていくことにつながる可能性があるように思える。

© YOHEI KATO 2019

元旦翌日のヴァレッタは晴天であり、雲ひとつない地中海の青空がどこまでも広がっていた。マルタ共和国：2020/1/3（金）04:36

5420.【マルタ共和国旅行記】スリマの書店で購入した5冊の書籍

いつもながら自由気ままに日記を綴っていると、当初言及しておこうと思ったことに全く言及しないままに文章が生成されていたことに改めて気づかされた。

昨日は、国立美術館や国立考古学博物館だけではなく、カラヴァッジョの絵を見るために聖ヨハネ大聖堂に行こうとしていた。ところが、大聖堂の入り口付近に到着した時、チケットを購入することを待っている人たちの長蛇の列があった。入場するまでに随分と時間がかかりそうだなと思った私は、今回は聖ヨハネ大聖堂に足を運ぶことをやめにした。その代わりに、元旦に散歩している時にスリマのエリアで見つけた書店に足を運ぶことにした。そこで神話学に関する図鑑のようなものを購入したかったのである。

少し早めにヴァレッタを出発し、スリマに向かうバスの中でぼんやりと考え事をしていた。旅の良さはまさに非日常的な意識に私たちをいざない、日常の発想の枠組みを取り外してくれることによって、普段では決して得られないような考えや感覚が得られることである。とりわけ私にとって旅は、今後の人生や生き方に関する新たな考えをもたらしてくれる素晴らしい機会になっている。

バスに乗って、輝く地中海をぼんやりと眺めていると、まさにそうした新たな考えがいくつも芽生えてきた。そうこうしているうちに、バスはスリマに到着した。バスを降りた私は、その辺りの地理をもう頭に入れていたため、全く迷うことなく目的の書店に到着した。元旦にはその店は閉まっており、外から中を覗くことしかできなかったため、私はてっきりその店は神話学専門店だと思っていた。なぜなら、通りに面したショーケースにやたらと神話学関係の書籍が置かれていたからである。しかし実際に中に入ってみると、神話学の書籍だけではなく、他のジャンルの書籍も置かれていた。どういうわけか、私は最初に科学のコーナー、しかも宇宙に関するコーナーにいた。そこで私は、スティーブン･ホーキング博士が執筆した“A Brief History of Time”という書籍を手に取った。

ここ最近は、秘境的･密教的な思想を作曲に活かせないかを考えていただけではなく、宇宙に関する発見事項を作曲に活かせないかと考えていた。そうした関心に合致するかのような宇宙法則や発

見事項が本書に詰まっており、豊富なイラストが私の思考や感覚を刺激していた。そうしたこともあり、本書を購入することを即決した。その他にも遅ればせながら“The Tibetian Book of the Dead”を購入した。数年前にライデンの古書店を訪れた際に、古代エジプトに関する死者の書を購入していたのだが、チベット死者の書についてはまだ読んだことがなかった。今回まさかマルタで本書を購入することになるとは思っていなかったが、偶然にも美しい装丁を持つ赤いハードカバーの書籍が一冊だけ本棚に置かれており、何の迷いもなくそれを購入しようと思った。本書もまた作曲に活かすための参考資料である。

古代･現代のチベット人たちの死に関する発想を作曲の中に取り入れていく。それは何か直接的な形として曲の中に現れてくるかもしれないし、間接的に現れてくるかもしれない。その他には、神話学関係の書籍を2冊購入した。両者は共に図鑑のような書籍であり、タイトルは“The Mythology Book”と“Myths & Legends: An Illustrated Guide to Their Origins and Meanings”というものだ。こちらもイラストが豊富であり、見ているだけで楽しくなってきてしまう。チベット死者の書については、その中身を眺めている時に不思議な恍惚感があり、それとは少し異なる恍惚感が神話学の2冊を読んでいる時にも起こった。最後に、もう一冊購入したのは“365 Thoughts on the Path of Buddha”というものである。本書は、1日1つ仏教関係の示唆深い言葉に触れられるようになっており、言葉の背後に添えられている美しい写真が大変気に入った。毎日日記や曲を作る際には必ず日時を記載しており、その上か下にでも、その書籍に書かれているその日の言葉を書き留めておきたいと思う。マルタ共和国：2020/1/3（金）05:05